地域と学校　その20（最終回）

地域と学校の未来図

小松 尚（名古屋大学大学院環境学研究科准教授）

いなべ市立石榑（いしぐれ）小学校の建替計画やその後のコミュニティスクールとしての取り組みを題材にしながら、地域と学校の関わりについて書き連ねてきたこの連載も、今回が最終回。学校を核にしてこれからどんなことができそう？　石榑のような地域力の根源はどこにあるの？　他の地域から学ぶべき点は何だろう？　行政や建築家、そして私のような研究者はこれから何をすべきなのか？･･･まだまだわからないことばかりなのですが、最終回ということもあり、ここで現時点での私なりの総括をしたいと思います。

学校という記憶

日本人の誰もが共有可能な建築空間の記憶のひとつは、学校ではないでしょうか。住宅というのは、ひとそれぞれ様々な住生活を重ねており、深くて鮮やかな記憶を持っていますが、共有はしにくいものです。他の公共建築も、機能やサービスは似通っていても空間体験や記憶まではなかなか共有できません。でも学校はそれが可能です。教室の様子や季節ごとの行事のこと、給食で何を食べたか、どんな遊びに夢中になったかなど。私も大学で20年以上若い学生と話していても、学校のことは話題が共有でき、話が弾みます。もちろんそれは、現在の校舎が標準設計によることや、教育システムが日本全国で統一されているからでもあります。それでも、世代間で記憶を共有できる空間は貴重です。また、学区制という地理的、社会的な体系も、地域コミュニティの成り立ちに影響を与えています。

これから、地域との関係を考慮した学校はますます増えてくるでしょう。石榑小学校のような学校だけでなく、その18でご紹介した各地の事例のように、学校が、そしてその空間がその地域のあり様を映し出すのです。

地域と学校のいま

しかし、地域と学校のいまの関係をみると、方向の違う2つの力が、事を難しくしているように思われます。一つは地域と学校の結びつきを強めようとするものです。学校での教育や運営を支えようとするコミュニティの働きかけ。それを契機にして、コミュニティのありかたや体制を考え直す住民の意識改革や精力的な取り組み。建築的にも災害時の避難所としての耐震性能の向上だけでなく、コミュニティ活動を育む拠りどころ、また高齢者施設や子育て・子育ち支援の拠点として、複合化や空き教室の転用等々が行われています。公共建築、公共空間としてのあたらしい可能性を拓く学校が各地で生まれていることは、その18でご紹介したとおりです。学校という空間と仕組みを地域に開き、そこで地域と学校双方の新しい姿を描き出そうという意思を持ったうねりが各地で巻き起こっています。

一方、地域と学校の間に距離を生むような状況があるのも事実です。2001年の大阪・池田小学校での惨事から、学校にとって子どもたちの安全確保は大問題であり、門を閉じ、塀を築いて空間的に隔離するのが日常になりました。また、少子化による統廃合も過疎地だけでなく、都市部でも進んでいます。わが町の学校や母校がなくなる寂しさは想像に難くありません。さらに、個人情報の保護からクラスの名簿をつくらなくなったところも。私個人としては行き過ぎの感を否めませんが、これも学校と地域の現在の関係を如実に表わしているのでしょう。

石榑のコミュニティから気づく

さて、石榑小学校を訪れるまで、私はあまり「コミュニティ」というものに期待をしていませんでした。私も基本的に都会生活が長く、地縁的なコミュニティの中で育ったわけでもなく、懐かしさや憧れも特にありませんでした。むしろ、ウェットな人間関係には距離を置きたいというのが本心だったかもしれません。石榑小学校へ最初に訪れた時のワークショップの会場に掲げられていた「コミュニティ拠点としての･･･」と書かれた看板も、キャッチフレーズとしての理解はできても、それ以上の共感はなかった気がします。

しかし、この石榑小学校での「コミュニティ」とは、地縁的ゆえに排他的なものでは必ずしもなく、地域と学校の関係を脈々と築きあげてきた結果として、いま目の前に存在している。つまり固定した形ではなく、意思を持って変わり行く営みの総体なのではないかと感じたときに、「コミュニティ」の新しい側面に気づくことができました。石榑小学校と石榑という地域をもっと知りたいと思った理由です。

新しいコミュニティ像と専門家

さらに、建替え計画とコミュニティスクールの運営に関わることで、行政と住民、そして建築家や研究者といわれる専門家の役割を改めて考えることになりました。試行錯誤は承知の上で地域住民が自ら考え、動く。行政は、これまでのように牽引するのではなく、それを後ろから推し支える。建築家は必要な知識や技術を落下傘のように授けるのではなく、その場に応じた形を生み出していく。これからのまちづくりの一つの姿であり、明日をつくって行く「コミュニティ」の姿といえるのではないでしょうか。

学校農園の手入れ（2008年8月）
お茶作りなど、石榑ならではの授業が地域の人々と行われます。
農園の手入れも協働授業の一環です。

そして、私のような研究者は何をすべきなのでしょう？　かつては、建築家が拠るべき計画や設計に関する知識や技術を第3者的な観察を通して紡ぎ出し、次の計画や設計に活かすというのが一つの使命でした。これは、行政や企業がエンジンとなる経済成長時代、大量生産時代には成功のためのモデルやガイドラインを提示するという点で有効でした。しかし、現在は行政、企業、地域住民、NPO、専門家たちがどのようなバランスでひとつのコミュニティを築き、まちをつくっていくのかが問われる時代です。機動力とバランスを備えたコミュニティをつくることへの支援が必要ではないか、と最近考えるようになりました。その19でご紹介したデザインワークショップについても、コミュニティスクールへの参画という目的はあるのですが、同時に、地域の人々だけで抱えず、外部の視点や方法をも活かす、開かれた運営を目指して欲しい。そんなささやかなメッセージのつもりもありました。

里まつりで全員集合（2005年7月）
初めての里まつりで、参加者全員が中庭に集合。新校舎での地域協働による運営が、ここから始まりました。

地域と学校の私的未来図

子どもが減り、人口も減っていく時代になりました。街は少しずつ小さくなっていかざるを得ないでしょう。「コンパクトシティ」という概念も行動の段階になろうとしています。そのときに、何が街をつくる軸になりえるのでしょうか。

ひとつの可能性を学校に求められるならば･･･徒歩で行ける範囲（エリア）に、これまでの学校を構成する要素が街に入り込んで、全体として学校と街をつくるのはどうでしょう？

乳幼児の子育て支援から小中学校のような義務教育、中等・高等教育や職業訓練、生涯学習のための場が街のそこかしこにあって、そこではいわゆる教室ではなく、現在でいう図書館や特別教室の機能や空間が主役になります。先生と生徒という関係だけでなく、様々な世代が互いに教えあって学びあう場。そうなると、学びとはいわゆる学習というより、日々刺激を受けて頭と体と心を動かす、という感じかも。

そんな場所が生まれることはそれほど遠いことではない気がしています。イギリスにはもう既にそのような学校（?）があると聞きます。石榑小学校はコミュニティと協働で運営する「コミュニティスクール」ですが、習志野市立秋津小学校のように「スクールコミュニティ」と銘打って、学校やそれに関わる人のネットワークや空間を活かしてまちづくりに取り組む地域も出てきています。さらに、子どもたち自身が運営している児童館も既にあります。

授業参観日の図書室（2008年6月）
授業時間中に就学前の子どもたちは絵本を見たり、読み聞かせをしてもらったり。
今年から、本好きの方々による図書部会もスタートしました。

そもそも学びとは、人、社会、そして未知の世界を知り、関心を深めるプロセスだと思います。それは子どもの頃で終えることではなく、大人になっても無意識のうちに日々続けています。現在の学校も、子どもたちにとっては成長のために刺激を受ける場であるはずですし、これからもそうあり続けて欲しいと願っています。

最後に･･･この連載を始める頃、大河ドラマのような歴史ではなく、地域の営みの歴史、いや履歴といった方がいいかもしれませんが、記録して残していくことの大切さを感じていました。石榑小学校の新校舎建設計画の中心である地域利用ゾーンを計画するに至る伏線のひとつは、30年前の旧校舎の建設にあることを知ったことが、その契機でした。できた物理的な空間、建築の背景に潜む、しかしそれなしではできなかった地域の人々の思いや「行動体」としてのコミュニティにもっと目を向けるべきではないかと。よって、この連載は、私なりにそのひとつの取り掛かりにしたいと思って書き始めました。

20回にわたる連載の機会を与えてくださいました愛知建築士会の皆様に、心から御礼申し上げます。